

## 東京大学アーカイヴズ計画

— 安田講堂の再生・再利用の提案 —

「東京大学史紀要・第五号」において、東京大学アーカイヴズを実施するためには、安田講堂を再生・再利用することが最も適切であることを述べた。すなわち、その論点を要約するならば、(1)内田祥三による本郷キャンパスの基本構想において、すでに大学博物館がその中心をなす建物として考えられていたこと、(2)東京大学におけるアーカイヴズ設立の必要性は、今日、内田構想の時代以上に緊急の度合を増していること、(3)安田講堂は、その位置、意匠ともに、キャンパスの中心的施設として利用されるべき建物であり、その利用方法としては、多面的な利用を考慮したアーカイヴズとすることが最もふさわしいこと、の3点である。

この計画案は、この安田講堂の再生構想に続けて、その施設計画上の、また建築意匠上の可能性を検討した上で、ひとつの提案をおこなうものである。当然のことながら、この案は基本構想のスケッチに過ぎず、今後各方面から検討されるべき課題の数多くあることは言うま

稲垣 栄三  
香山 壽夫

い。ここで検討した基本的課題は、主として次の点である。(1)建築計画的に安田講堂は、大学アーカイヴズとしての新たな利用に適當であるか。——すなわち、大学アーカイヴズは、研究施設、展示施設、更に催事施設等の複合した複雑な施設と考えられるが、安田講堂の半円形のオーデイトリウムを中心とした独特な空間構成は、そうした新しい利用にふさわしい計画が可能か。(2)建築意匠的に安田講堂に新たな増築あるいは改築を行うことが可能であるか。——すなわち岸田日出刀による安田講堂の意匠はゴシック、表現主義、アール・デコ等の様式を組み合わせた独特のもので、東大の建築的シンボルとして既に定着したものであるが、これを損うことなく、むしろそれに新たな価値を与えるような増築は可能か。(3)キャンパスの全体計画上、安田講堂周辺に新しい計画が可能か。——すなわち、安田講堂は、キャンパス中心にあるが故に、その再利用はキャンパス全体の空間構成に大きな影響を及ぼす。それに加えて、安田講堂は急勾配の敷地の段差の上に

特異な配置のされ方をしてゐる。この計画が、キャンパス全体を混乱させることなく、むしろ新たな統一を生み出す核となり得るか。以上に加えて、更に実現化のための基本には、建築法規上の検討、構造耐力上の検討が必要であり、これについては更に進んだチェックが必要ではあるが、致命的な問題はないと私達は判断している。

## 二、計画の要点

新しい増築部分は、安田講堂の東側、すなわち背面に置く。その理由は、安田講堂の建物正面、および広場は、すでに完結したものとして人々のイメージの中に定着していることが第一であるが、更に動線的にも東側が処理し易いこと、またこれを機に、キャンパスの中心部にありながらこれまで乱雑に扱われてきたこの空間を、魅力あるものに作り直すことが可能だと考えたことも一つの大きな理由である。

アーカイヴズの展示部分はこの北東部にあり、地下一階、地上二階をなす。この配置によって、アーカイヴズはキャンパス内の主要通路である北側の榊並木に面して正面を持つことが出来る。また同じく、この道路からサービスのアクセスも効果的に取ることが出来る。一方、南側には広場を設け、サンクン・ガーデンを介して展示場への一般入口につながる。この広場は、三四郎池と、講堂前に接しているので、敷地の高低差を効果的にデザインすることにより、人々の楽しく集うキャンパスの中心的外部空間となり、アーカイヴズを人々の親しみ易いものとするのに貢献するであろう。増築部分の屋上は、テラスと庭

園とし、ここにも講堂への出入口を設け多数の人の利用の便をはかる。また円形の段階塔は、講演会、シンポジウム等の利用の際、アーカイヴズと一体的な利用をはかるためのものであると同時に、講堂二階席からの避難のためのものである。

講堂は、その見事な内部意匠を基本的に尊重した上で、座席、空調、音響等の設備を最新のものにし、新たな活発な利用が可能ならにする。講堂の下階は、アーカイヴズの資料収蔵庫とするが、その半円形の平面は効率的な書棚の配置に有効に利用出来よう。講堂外縁部の北東側、新築建物屋上庭園に面した部分に研究者の個室を配し、南東側の広場に面した側にはラウンジ、キャフテリア等のインフォーマルな交流の空間を設ける。

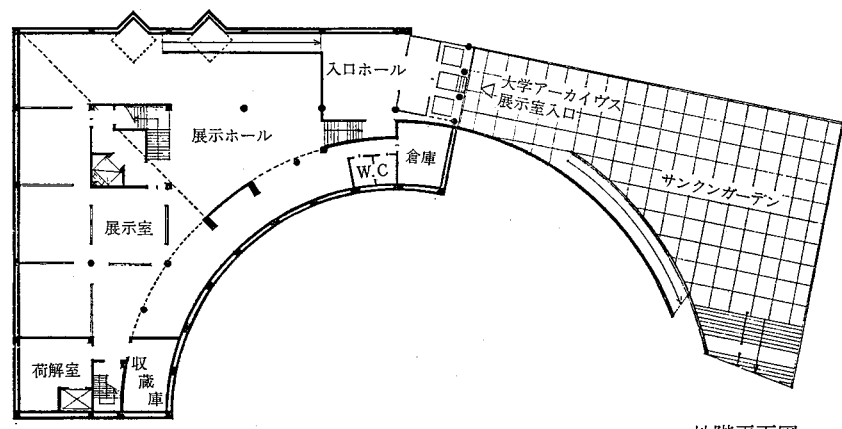
南側の広場を、サンクン・ガーデン、そして屋上庭園と講堂前広場は、講堂の壁の曲面に沿ってゆるやかに上下するランプ（斜路）でつながれ、様々な人の動線をさばくだけでなく、広場に楽しい活気を与えるようなものとする。

新築される部分は、低層で水平に広がった形態をとっており、その建築意匠は、たとえば滑かに磨かれた石や、輝くガラスや金属を用いた現代的に洗練された軽快なものが好ましいと考えられる。それは安田講堂の形態が、半円形で完結した形をしており、それに連続した共通の意匠を付すことは、安田講堂の従来を損ない全体を混乱させるのみであると考えられるからで、むしろ安田講堂の重厚な意匠と対比的な表現を与えることの方が、新しい効果を生むと考えるものである。

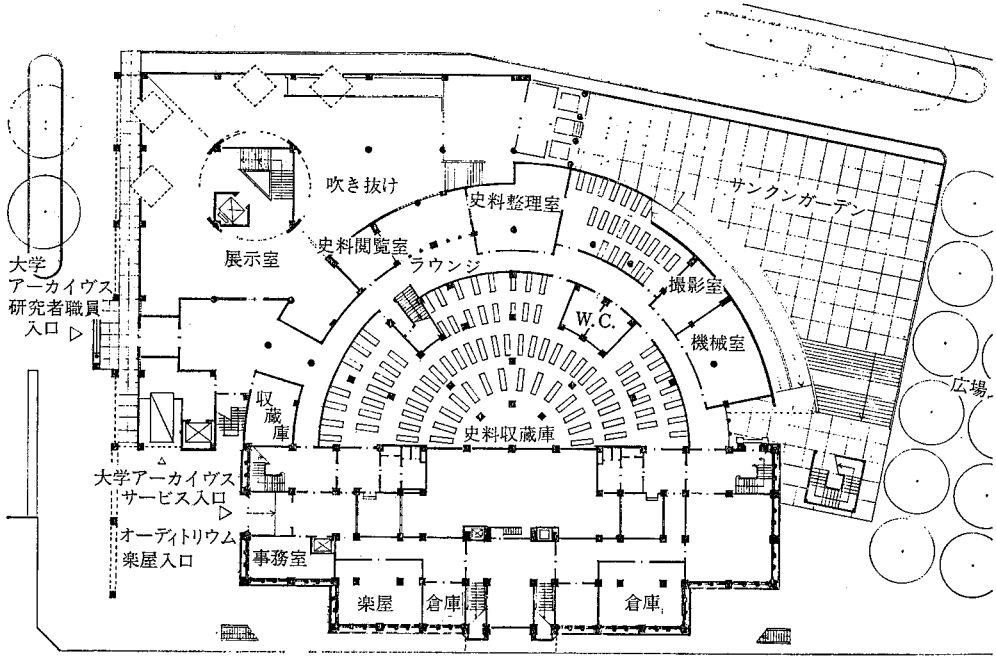
初めに述べたように、ここで示すものは、粗い構想のイメージに過

ぎない。しかし、そこにおいてすら、安田講堂をアーカイヴズとして再利用することの可能性は明らかになったと私達は考えるものである。平面図等に示した必要諸室等は、限られた資料にもとづき勝手に想定したものが多く、当然今後より具体的に関係者の論議の中で固めるべきものである。そうした更に進んだ具体化にむかって、この提案が学内の意志を統一することに役立つことを願うものである。

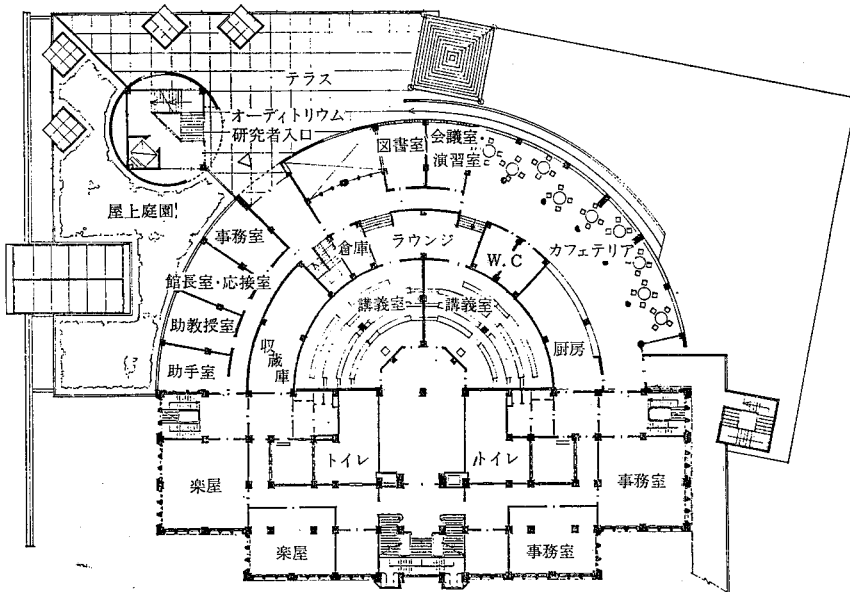
いながき えいぞう 工学部教授  
 こうやま ひさお 工学部教授



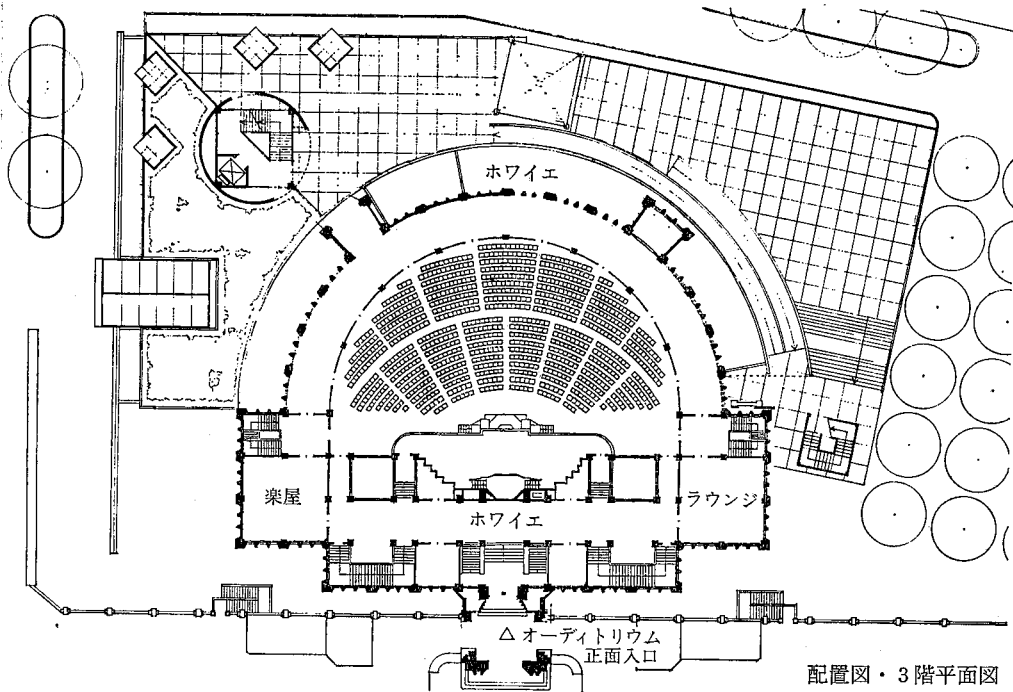
地階平面図



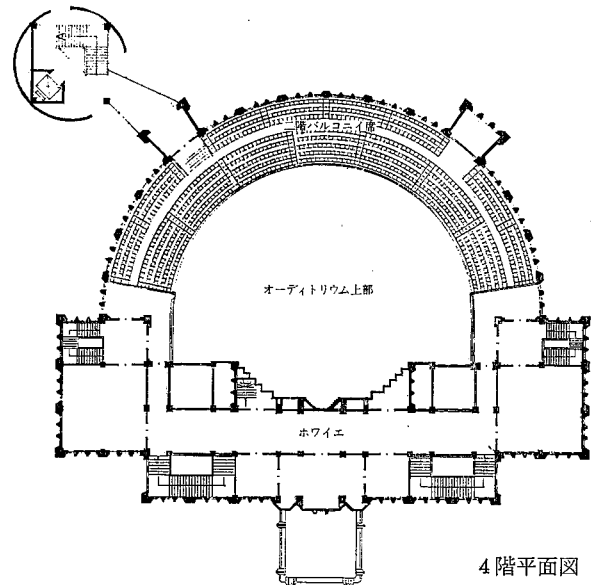
1階平面図



2階平面図



配置図・3階平面図



4階平面図